

平成23年度終了プロジェクト研究成果ダイジェスト

【研究代表者名：深堀聰子】

研究課題名	学習成果アセスメントのインパクトに関する総合的研究
実施期間	平成21～23年度
最終的な達成目標	経済協力開発機構「高等教育における学習成果調査」(OECD-AHELO)の導入が、大学にいかなる意図的・無意図的影響を及ぼすのかに関する知見を提供すること。
研究の方法	<p>国際比較アプローチ（日本、中国、韓国、台湾、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、アイルランド、メキシコ）を採用する。</p> <p>本研究では、各国で多様に構造化されている大学教育の質保証システムの相互補完的なアプローチの一つとして学習成果アセスメントを位置付け、各国でどのような学習成果アセスメントのアプローチが導入されており、導入に向けて政府・専門団体・大学等が議論を展開したり、体制を整えたり、実際に導入したりすることによって、大学における教学体制や管理運営のあり方、既存の質保証システムの構成や重点にどのような変化をもたらされているのかを明らかにする。</p>
主な事実発見	<p>本研究で注目したいずれの国でも、学習成果重視の質保証アプローチへの転換がはかられていた。各国の取組は多様であるが、大きく二つのタイプに分類することができる。第一のタイプは、大学教育の範囲と水準に緩やかな標準性をもたせるタイプである。そこでは、単位や学位の互換性や等価性を保証する仕組み(ECTS、資格枠組み)が導入されており、それらに学習成果を対応づける作業も進められている。参照基準として共有されたコンピテンスにもとづいて教育プログラムが設計されている場合、日常的に実施される教育評価が質保証アプローチとしての学習成果アセスメントの意味をもつことになる。こうした学習成果アセスメントのインパクトとして、教育プログラム設計原理が「教員が何を教えるか」から「学生に何を学ばせるか」へとパラダイム・シフトしてきている点があげられる。</p> <p>第二のタイプは、出口段階での学習成果アセスメントを志向するタイプである。コンピテンスが共有されていない場合、学習成果アセスメントの概念枠組みは抽象的な内容にとどまり、測定するコンピテンスも教育プログラムと直接リンクしたものにならない。こうした学習成果アセスメントが質保証アプローチとして限られた妥当性しかもたないことが経験知として共有されてきている。学習成果アセスメントの可能性と課題に関する理解の深まりによって、より洗練されたツール開発・活用の基盤が形成されてきている点を、インパクトとしてあげることができる。</p>
教育政策への貢献	<p>本研究をとおして、学習成果に基づく大学教育の質保証アプローチには、標準化のタイミングにおいて異なる上述の二つのタイプが存在することを明らかにすることができた。そして、OECD-AHELO（工学分野）は、「参照基準としてのコンピテンスに基づく学習成果アセスメント」として、二つのタイプの特徴をあわせもつことを示すこともできた。すなわち、工学分野では国際的な参照基準の共有化が既に進められてきていることから、AHELO（工学分野）でその概念枠組みを採用することで、教育プログラムと直接リンクしたコンピテンスを測定するテストを開発することができた。この点は、他の専門分野に一般化することはできない。</p> <p>本研究から導かれるAHELO（工学分野）導入のインパクトとして、教育改善にむけた具体的な示唆を多く含んでいることから、各大学において教員が参照し、「学生に何を学ばせるか」という観点から教育プログラムのあり方や自らの教育の取組を自発的に見直す重要な契機となりうる点を指摘することができる。ただし、そのためには、テスト問題や採点基準に関する情報が広く公開されることが条件となる。</p>